

3. 解説：日本の精神構造の深層

Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典

いま、日本と中国・韓国との関係に緊張感が高まっている。台湾有事をめぐる日中の対立、徴用工問題・歴史認識問題をめぐる日韓摩擦は、単なる外交上の利害衝突ではなく、各国の文化的・精神的基盤の違いが根深い影を落としている。このため、AIの力を借りながら、日本の精神構造の深層に焦点を当て、その歴史的形成と近隣諸国との関係を体系的に整理してみた。

(1) 多神教的世界観と「本音と建前」

日本の宗教文化は神道・仏教・儒教が重層的に習合した独特のものである。一神教のような絶対的道德律より、状況に応じた判断を重視する相対主義が根づく。神道に見られる「罪」ではなく「穢れ（けがれ）」の発想は、倫理を内面的な罪責ではなく、外面向的な状態として扱う。このため、行為の善悪より「場の空気」や「関係性」が重視されやすい。仏教の日本的受容も特徴的である。鎌倉仏教は厳格な戒律より「信心」「心性」を重んじ、形式と実質を分離する宗教観を育てた。これは社会における「建前と本音」の二重構造と響き合い、国際関係では「表向きの声明と実際の行動が一致しない」という批判につながりやすい。

(2) 日本化した儒教——「忠」の絶対化と形式主義

日本では儒教が受容される過程で、中国とは異なる発展を遂げた。特に、武家社会では「孝」より「忠」が最上位の徳目として重視され、国家・主君への服従が倫理の中心へ移った。また儒教の「礼」も本来の内面の誠実と行為の一致という意味から離れ、形式の遵守そのものが目的化した。「誠意より形式」が優先される傾向は、歴史問題における「抽象的な謝罪」や「象徴的行為」にとどまりがちな日本外交の背景にもある。

(3) 近代に“発明された”武士道と「恥の文化」

国際的にイメージされる武士道は、実は明治期に形成された「発明された伝統」（近代において、武士の価値観を再解釈し『武士道』という概念が創られた）である。近世武士の実態は合理的・官僚的で、清廉な「武士道精神」が日常倫理であったわけではない。しかし、この近代武士道が強調した「名誉」「恥」の文化は、他者からどう見られるかを倫理の基準とする傾向を強めた。これは、内面的良心を重視する西洋の「罪の文化」と対照的で、国際批判に対して防衛的・感情的反応を生みやすい。

(4) 日本社会を規定する「世間」と「内／外」構造

阿部謹也（歴史学者）が指摘したように、日本では「社会」という契約的・制度的公共空間より、「世間」という人間関係の網の目が行動を規定してきた。

- 明文化されない暗黙の了解
- 同調圧力と「空気」
- 「世間体」という外部評価
- 「内（ウチ）」と「外（ソト）」の境界

この構造は国際関係では「外」への冷淡さ、契約やルールより情緒を優先する対応として現れ、摩擦の要因になる。

(5) 「甘え」と「間柄」—言語化を避けるコミュニケーション

土居健郎（精神科医・精神分析家・評論家）の「甘え」概念は、日本人の人間関係を理解する上で重要だ。相手に察してほしい、説明しなくても分かってほしいという心理が強く、交渉や外交で求められる明示的コミュニケーションと衝突する。

さらに、和辻哲郎（哲学者・倫理学者・文化史家）の「間柄」の倫理は、個人の権利より関係性の調和を重視する価値観を理論化した。この発想は、日韓関係などで「個人の権利」より、二国間関係の維持を優先するという構図を生みやすい。

(6) 「無責任の体系」と「空気」の支配

丸山真男（政治学者・思想史家）が指摘した「無責任の体系」は、意思決定の不透明さと責任の曖昧化を特徴とする。誰も最終責任を負わず、事後的な「空気の同調」で物事が動く傾向が現在も続く。山本七平（評論家・思想家）の『空気の研究』が示すように、日本では論理より“場の雰囲気”が意思決定を左右しやすく、国際社会のルールベースの論理と齟齬を生む。

(7) 東アジア三国の「文化ロジック」が噛み合わない理由

日本・中国・韓国は、歴史的背景だけでなく、文化的論理そのものが大きく異なる。

- ・ 日本：世間の論理（曖昧さ・関係性重視）
- ・ 中国：面子の論理（威信・序列重視）
- ・ 韓国：道徳の論理（善惡の明確化・正統性重視）

日本の曖昧さは、中国には「誠意欠如」、韓国には「責任回避」と映り、三者間の誤解を固定化させている。

(8) 変わりつつある若い世代とデジタルの逆風

Z世代は個人主義化、社会貢献意識、多様性受容など、従来の「世間」中心の価値観から離れつつある。他方、SNS上では「デジタル世間」ともいえる新たな同調圧力が強まり、「空気の可視化」がより強力になっている。

(9) 克服に必要なこと

日本が文化的摩擦を乗り越えるには、相手国が含めて、次の転換が欠かせない。

- ・ 「世間」から「社会」へ——普遍的ルールと説明責任を重視
- ・ 責任の所在を明確にする意思決定
- ・ 文化的論理の差異を言語化し、相互理解の対話を進める
- ・ もう若い世代の価値観を国際関係に反映する

日本の対外摩擦は、宗教観・倫理観・社会心理・意思決定構造等、多層的な精神構造が複合した結果として生じている。これらの理解なくして、日中・日韓関係の持続的改善は望めない。しかし同時に、価値観は変化しつつある。日本が自らの深層構造を客観視し、他国の論理と折り合わせる努力を進めることで東アジアにおけるハーモナイズの道は開かれるのでなかろうか。

補：本解説の参考資料等は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>、バックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column>